

琉球大学学術リポジトリ

伊平屋村の自然条件と産業振興 水産業を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学アジア太平洋島嶼研究センター 公開日: 2012-06-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡久地, 健, Toguchi, Ken メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/24676

伊平屋村の自然条件と産業振興

水産業を中心に

渡久地 健

1 沖縄県離島における伊平屋村の位置づけ

(1) 沖縄県最北端の有人離島

沖縄県は160の島々から構成される¹⁾。そのうち、歴史上、人間によって居住された経験を持つ島は、沖縄島（沖縄本島）を含めて、53島である。そして2003年現在の有人島は49島である。その49の有人島のなかで、「沖縄振興開発特別措置法」（昭和46年制定）によって「離島」に指定されている島——いわゆる「法対象有人離島」——は40島である（末尾の付表参照）。

伊平屋島は、沖縄県の最北端の島ではないが²⁾、有人島のなかでは最も北に位置する離島である。「沖縄県最北端の離島」ということは、「最南端の離島」と同様、旅人にとってみれば、一種の憧憬を誘うが、島に暮らす島民にとっては、やはり隔絶性の大きい孤島である、といえる。

(2) 外海離島

本土離島を対象とする「離島振興法」（昭和28年制定）の、第3次離島振興計画において初めて離島類型化が導入された。この離島類型は、本土の中心的な都市との間の航路距離（時間）、欠航状況、島の人口等を指標として、つぎの6離島に分類されている（日本離島センター編、1996、p. 4）。

①内海・本土近接型離島：航路が平穏（内海）で欠航がほとんどなく、本土の中心的な都市から1時間圏内と考えられる離島

②外海・本土近接型離島：本土の中心的な都市から1時間圏内と考えられるが、外海に位置しているため、荒天時には欠航を余儀なくされる離島

③群島主島：群島の中心的な島で、人口おおむね5,000人以上³⁾の離島

④群島属島：群島を構成する島で、群島主島と航路1時間以内で結ばれる離島

⑤孤立大型離島：人口おおむね5,000人以上の孤立した離島

⑥孤立小型離島：人口5,000人以下の小規模で、孤立した離島

この離島類型を参考にして、沖縄県の離島を類型化すると、図1および表1のように分類することができる。

図1 沖縄県の離島類型（試案）

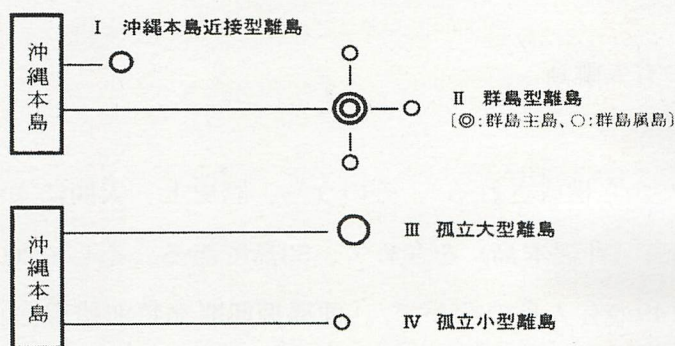


表1 沖縄県離島の類型

類型	事例
I 沖縄本島近接型離島	古宇利島/伊江島/水納島（本部町）/津堅島/久高島
II 群島型離島	宮古諸島（多良間島を除く）/八重山諸島（与那国島・波照間島を除く）/慶良間諸島
III 孤立大型離島	久米島（奥武島・オーハ島を含む）
IV 孤立小型離島	粟国島/渡名喜島/多良間島/与那国島/波照間島/南大東島/北大東島

（注）宮古島は宮古諸島の、石垣島は八重山諸島の群島主島である。

沖縄本島と伊平屋の間は、沖縄の古典舞踊音楽「上い口説」に「伊平屋渡立つ波押しすいてい」と歌われるように、古来、航海上の難所として知られ、伊平屋航路は、夏秋期の台風接近時や、冬期の北東季節風の強い日には、欠航を余儀なくされる。伊平屋島は、「外海離島」のなかでも、最も航路条件の厳しい離島といえる。

(3) 群島型離島それとも孤立小型離島

さて、上の離島類型において、伊平屋島（架橋で同島と結ばれた野甫島を含む）は、「Ⅱ 群島型離島」とすべきか、あるいは「Ⅳ 孤立小型離島」とみるべきかは、微妙である。隣島の伊是名島との間の交通が緊密であれば、両村の島々をあわせて「群島型離島」とみなすことができる。しかし、現状は、両島がそれぞれ独自にフェリーを持ち、運天港（沖縄本島北部）との間に定期航路を運行しているが、両島との間には小型のチャーター船はあっても定期航路で結ばれていない、という点からみれば、伊平屋島も伊是名島も「孤立型離島」である、いえる。しかも、いずれも人口規模は5,000人に遠く及ばないので「孤立小型型離島」ということになる。

「群島型離島」と「孤立型離島」とでは、産業基本計画をはじめとする離島振興策の基本方向において、大きな違いがある。「群島型」では、離島間の交通基盤の整備（航路整備や架橋）により、群島全体をネットワーク化し、生活圈を形成する考え方になる。一方「孤立型」では、各島（村）がそれぞれ沖縄本島との間の交通の便を図り、1島（村）としての発展を基本に据える方向となる。しかし、両村が合併するか否かに関係なく、「群島型」の方向は検討されてよいと考えられる。

2 伊平屋島の生態基盤

(1) 比較的耕地に恵まれた高島

沖縄県の島々は、高い島（以下、「高島」という）と平たい低い島（以下、「低島」という）の二種類の島に大別できる。高島は、島の大部分が山地・丘陵地が占め、河川があり、低島はその多くがサンゴ礁起源のサンゴ島で河川がない。高島と低島の自然条件を対比すると、表2のようになる。

表2 高島と低島の自然条件の対比

	主な地形	主な地質	主な土壌	水文系	主な植生
高島	山地・丘陵地	千枚岩・砂岩・チャートなど	国頭マージ (赤黄色土壌)	河川系	イタジイなど
低島	台地	琉球石灰岩	島尻マージ (石灰岩土壌)	地下水系	ガジュマル・オオバギなど

目崎（1985）に加筆

伊平屋島は、面積20.95km²、最高点（嘉陽山）の標高293.9mの典型的な高島である。島は、北東-南西方向に延びる細長い形で、長さ約14km、最大幅約3kmである。島の骨格をなす山地・丘陵地は、島軸に沿って北東-北西方向に並ぶが、連続するのではなく、5つほどの山塊に分かれ、しかも、全体としてやや西側（東シナ海側）に偏在している。そのため、西海岸では山地が海岸に接していることが多い。山塊を構成する主要地質は、中生代・古生代のチャート（前岳層）と中生代の砂岩頁岩互層（田名層）である。山地は、小谷によって刻まれているが、谷の発達はそれほど密ではない。山塊（山地）の周辺には、第四紀の砂礫層（前泊層）がつくる標高50m以下の砂礫台地が分布する。山地間には、比較的広い沖積低地（谷底低地）が広がっている（前門ほか、1988、p. 7-8、平凡社地方資料センター編、p. 525）。野甫島は、低島で全島が約5万年前の古砂丘起源の砂質石灰岩からなる台地である。写真1は、砂質石灰岩を切り出して造った屋敷囲いの石垣である。

一般に耕地に適する地形は、低地と台地である。その低地と台地を合わせた面積の割合みると、伊平屋村は約42%である。この数値は、隣島の伊是名島（高島）の約75%には遠く及ばないが、同じく高島である渡名喜村の約25%、渡嘉敷村の11%、座間味村の17%に比べれば、かなり高い値である。伊平屋島は高島でありながら、耕地にも比較的恵まれている、といえる（写真2）。



写真1 野甫島の屋敷囲いの石垣。古砂丘起源の砂質石灰岩が用いられている。



写真2 山塊（山地・丘陵）間に広がる広い沖積低地。手前はサトウキビ畑。

(2) 山地の土壌と植生

伊平屋島の山地・丘陵地の大部分はチャートで構成され、しかも斜面が比較的急であるため、土壌の発達はずしもよいとはいえず、しかも乾性の水分条件下にある。谷筋の部分は湿性で腐植の発達がよく、林木の生育も良好であるが、前述のとおり、伊平屋島の山地は谷の発達がよくない（喜名ほか、1988、p. 39）。また、伊平屋島は、細長い島で、面積の割には海の影響（強い海風と塩害）を強く受けるため、森林植生にとって厳しい土壌環境といえる。

しかし、そのような厳しい条件下にありながら、伊平屋島にはイタジイ群落分布する。イタジイは高島の山地・丘陵地の代表的な植生であるが、隣島の伊是名島（高島）にはごくわずかししか分布しない（政策科学研究所、1974）。平凡社の『沖縄県の地名』（p. 524）によれば、伊平屋島では、「近世から薪木を那覇などの消費地に売ることが行われていたが、明治30年代には松などの大木を壺屋に売ることが流行した」。図2は、伊平屋島の現存植生図である。イタジイ群落は山地の中心部に限定され、イタジイ群落の周囲にはリュウキュウマツ群落分布しているが、おそらく、近世において薪材としてイタジイ林が周辺から切り倒され、それが二次林のリュウキュウマツ群落に置き換わり現在に至っていると思われる。

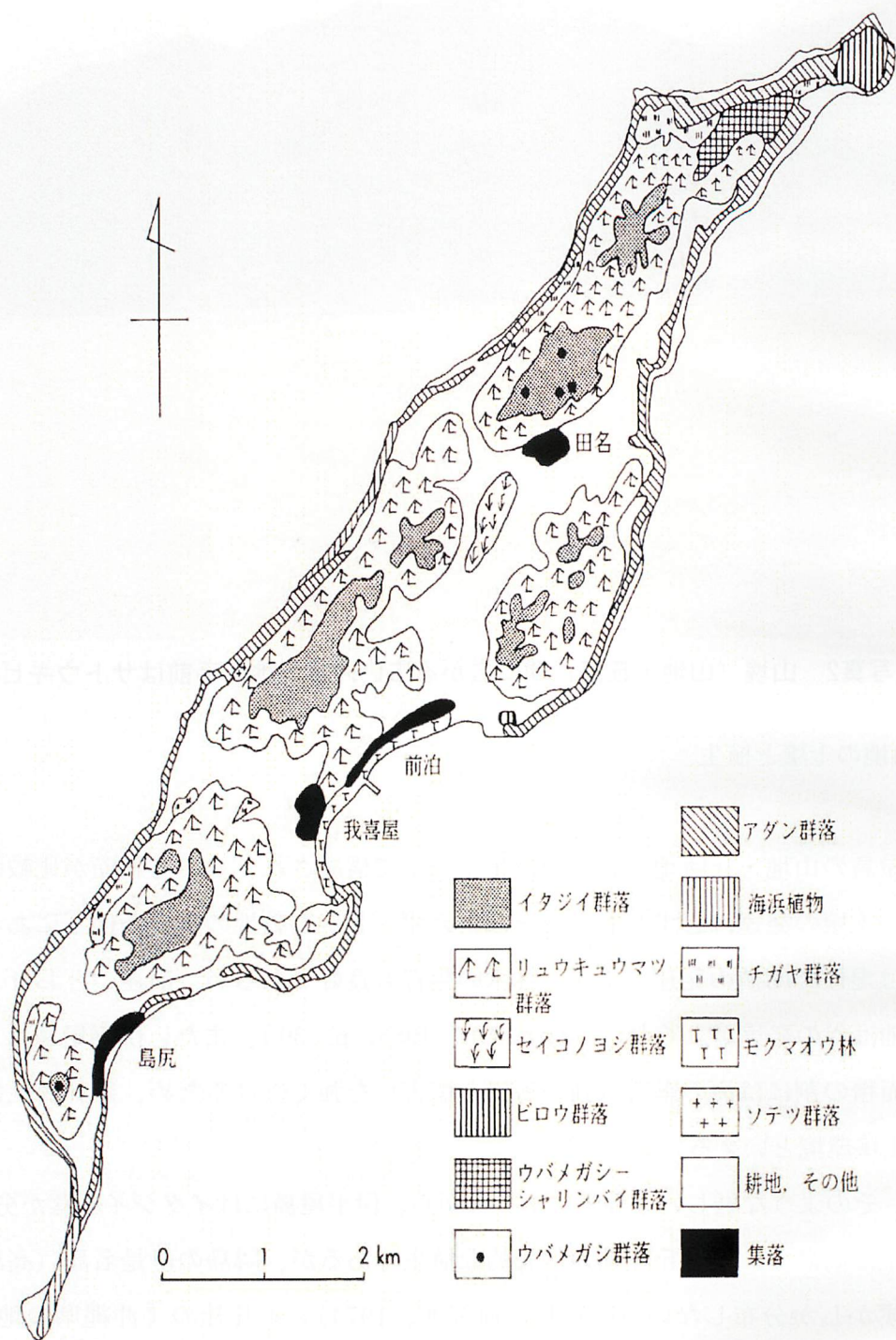


図2 伊平屋島の現存植生図（政策科学研究所、1974、p. 751による）

伊平屋島（面積：20.59km²）より小さい高島でイタジイ林を有する島は、前述の伊是名島（14.12 km²）と渡嘉敷島（15.25 km²）に限られ、しかも両島のそれは極めて限られた小面積に過ぎない。その点で、伊平屋島のイタジイ林は、近世以降減少しているとはいえ、大変貴重な自然資源といえる。森林には、さまざまな環境保全機能——水分涵養機能・土砂流失防止機能・遊水機能・景観形成機能など——を有し、また小動物の生息地、植

物の生育地としても重要である。林道の建設等は最小限に止めて、しかもその造成には自然に十二分に配慮した工法（近自然型工法）を採用し、人工構造物は極力避ける工夫が必要であろう。

その他、伊平屋島には、島の北端のクバ山のビロウ群落や田名集落南のセイコノヨシ群落は、貴重な植生であり、大切に保全していく必要がある。

3 伊平屋島を取り巻くサンゴ礁と海

(1) 島を取り巻くサンゴ礁

ほぼ全海岸を断続的に干瀬（礁原）が取り囲き、干瀬の内側には干潮時でも水深1-2mの水域をなす静かなイノー（礁原）が広がっている。

ところで、沖縄のサンゴ礁は、ほとんどが島の周囲を取り巻いて発達する裾礁である。その裾礁は、図3に示すように、3タイプに分類できる。岩盤でできた干瀬のみが広がる「干瀬型」（A）、干瀬とイノーで構成される「干瀬-イノー型」（B1, B2）、および干瀬を欠きイノーだけが広がる「イノー型」（C）の3タイプである。

伊平屋島における、タイプ別の割合は表3のとおりである。伊平屋島のサンゴ礁幅（全海岸線の平均値）は約400mで、伊是名島には及ばないものの、他の沖縄本島周辺の島々に比較しても幅広いほうである。タイプ別では、干瀬-イノー型が大半を占める。干瀬型は島の北端（クバ山）の海岸や、野甫島の西海岸に見られる（図5参照）。

サンゴ礁は、その自然景観の美しさ（陸上からの眺め、色彩、水中でみる立体的な景観）だけでも保存する価値がある。生態学者E. P. オダムはその著書『生態学の基礎』のなかで、「サンゴ礁は、レクリエーション的な面だけをとっていても保存する価値をもっている。それなくして、暖海のスキンドайビング産業もまた幕を閉じてしまうであろう」（オダム/三島訳、1975、p. 462）と記している。つまり、サンゴ礁の景観は貴重な観光資源である。しかし、それだけに止まらない。

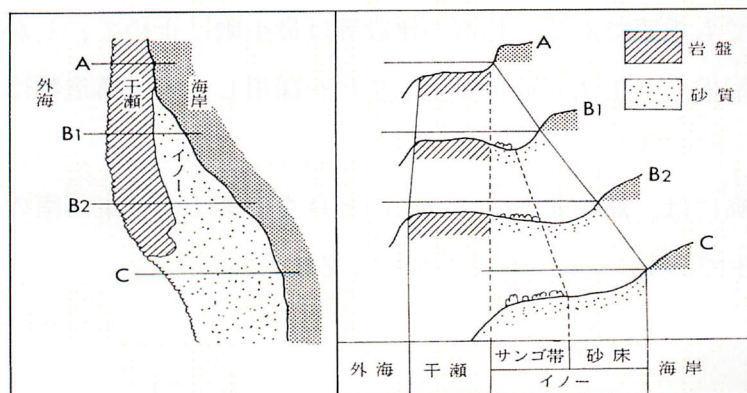


図3 沖縄のサンゴ礁のタイプ分け（渡久地、1993による）
A：干瀬型、B1, B2：干瀬-イノー型、C：イノー型

表3 伊平屋島・伊是名のサンゴ礁幅とタイプ別割合

サンゴ礁幅の平均値(m)		サンゴ礁のタイプ別割合（％）		
		干瀬型	干瀬-イノー型	イノー型
伊平屋島	393	6	64	31
伊是名島	518	6	81	13

沖縄の砂浜は白く眩しい。この白砂のほとんどは、サンゴ礁に由来している。造礁サンゴの破片、貝殻の欠片、有孔虫の殻、ウニの刺などからなり、サンゴ礁の生き物の死骸（骨格）である。むろん、高島においては、河川によって運ばれてきた岩石（砂礫）がわずかながら含まれるが、伊平屋島の砂浜においても、90%以上はサンゴ礁起源の砂であろう。その砂浜の砂が陸地（海岸）を守っている。また、サンゴ礁の外縁に位置する堤防状の地形である干瀬は、外海の荒波から島を守っている。サンゴ礁は多くの熱帯海域の生物のゆりかご（産卵場）であり、イノーはモズク養殖場（写真3）として利用されている。その他、島の人々の日常的なオカズ採りの場、冬の夜にイザイ漁を行なう場でもある。



写真3 サンゴ礁のイノーで営まれるモズク養殖。伊平屋島の南端・米崎より伊是名島（右奥）と具志川島（無人島）を望む。

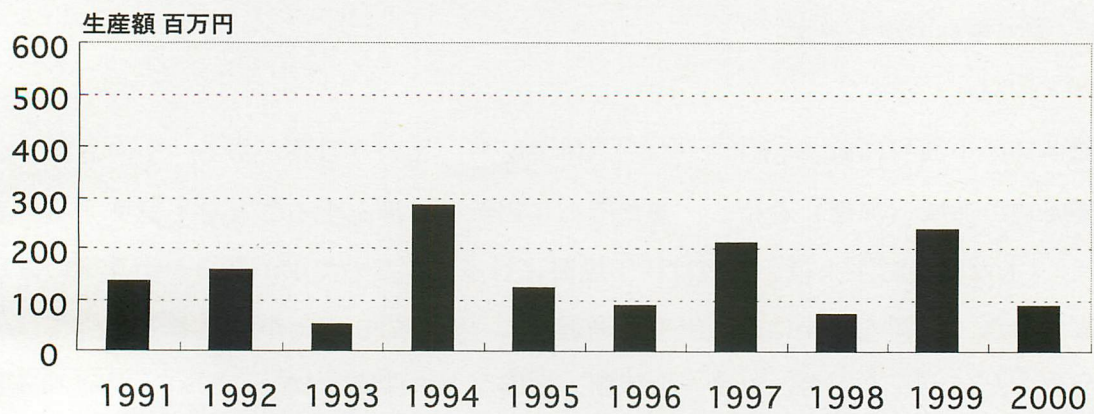


図4 伊平屋村のモズク生産の推移。沖縄総合事務局農林水産部編

統計「沖縄農林水産年報」(各年次)より作成

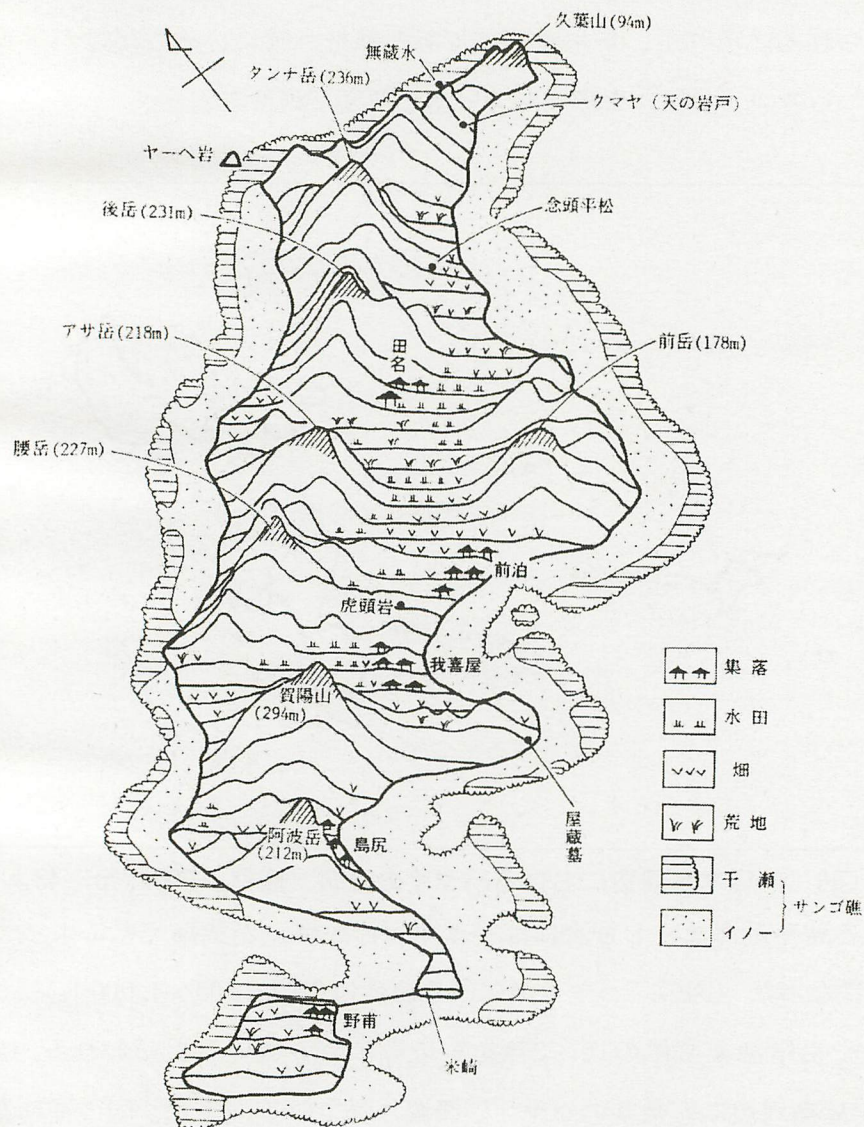


図5 伊平屋島・野甫島の鳥瞰図(渡久地ほか、1995、p. 32より)

(2) 伊平屋島の海と漁業

本部半島の小漁村には、「イヒャウミ」（伊平屋海）という言葉がある。その言葉は、伊平屋周辺の海域（漁場）を指し、またそこに出かけて漁をすることを意味する。たとえば、「あなたのご主人は、昨夜は伊平屋海に行ってきたのですか？」という言い方がされる。また、漁師のなかには、伊平屋島近海にマジク釣りに出かける者もかつては少なくなかった。マジクとは、ソネ、大陸棚、島棚などの深海（100～200m）に棲む高級魚、アオダイとハナフエダイ（いずれもフエダイ科）を指す。伊平屋島近海には「イヒャズニ」（伊平屋曾根）と呼ばれる好漁場が知られる。本調査で、伊平屋周辺海域の漁場について調査する機会はなかったが、複雑な海底地形に海の流れ（潮流や海流）が当たって栄養分豊富な深層水を局所的に上昇させるメカニズムが伊平屋島近海には多く存在していると考えられる。それが、貧栄養海域である熱帯海域に、そこだけが栄養塩の豊かな漁場、すなわちスニ（曾根）を形成していると考えられる。

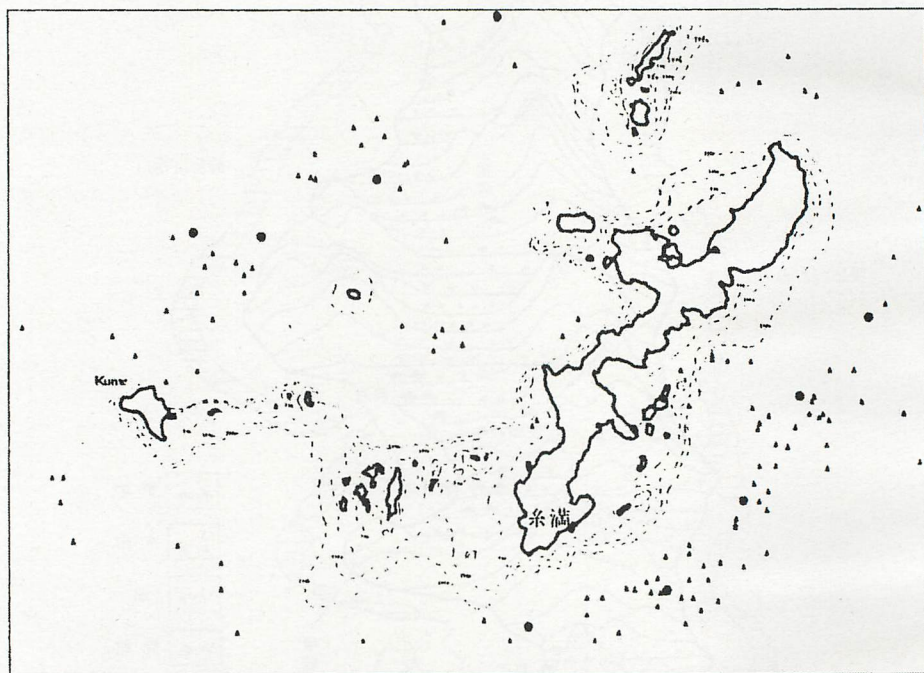


図6 沖縄本島周辺におけるパヤオの分布（鹿熊、2002、p. 43より）

また近年、各島の近海ないし沖合にはパヤオ（浮漁礁）が漁協や県によって数多く設置されるようになった（図6）。パヤオ漁による漁獲は年間2,500～4,000トン（12～20億円）に達し、今や沿岸漁業全体の10～27%をしめるに至っているといわれる（鹿熊、2002、P.44）。伊平屋島周辺にも数基のパヤオが設置されている。また、国の補助を受けて県が設置した鉄鋼製の大型パヤオ「ニライ14号」も伊平屋島の西沖に設置されている（写真4）。以上のように、伊平屋村は、漁業を支えるサンゴ礁と海の資源には恵まれているといえる。この豊かな水産資源を活用・保全した持続的な漁業振興が重要テーマといえよう。



写真4 伊平屋村の西沖に設置されている大型パヤオ「ニライ14号」
(沖縄県ホームページより)

(3) 沖縄県の漁業と伊平屋島の漁業

沖縄県の漁業は、近年、遠洋漁業が衰退し、また沖合漁業も減少している。代わって沿岸漁業と海面養殖業が相対的に重要性を増している（図7）。

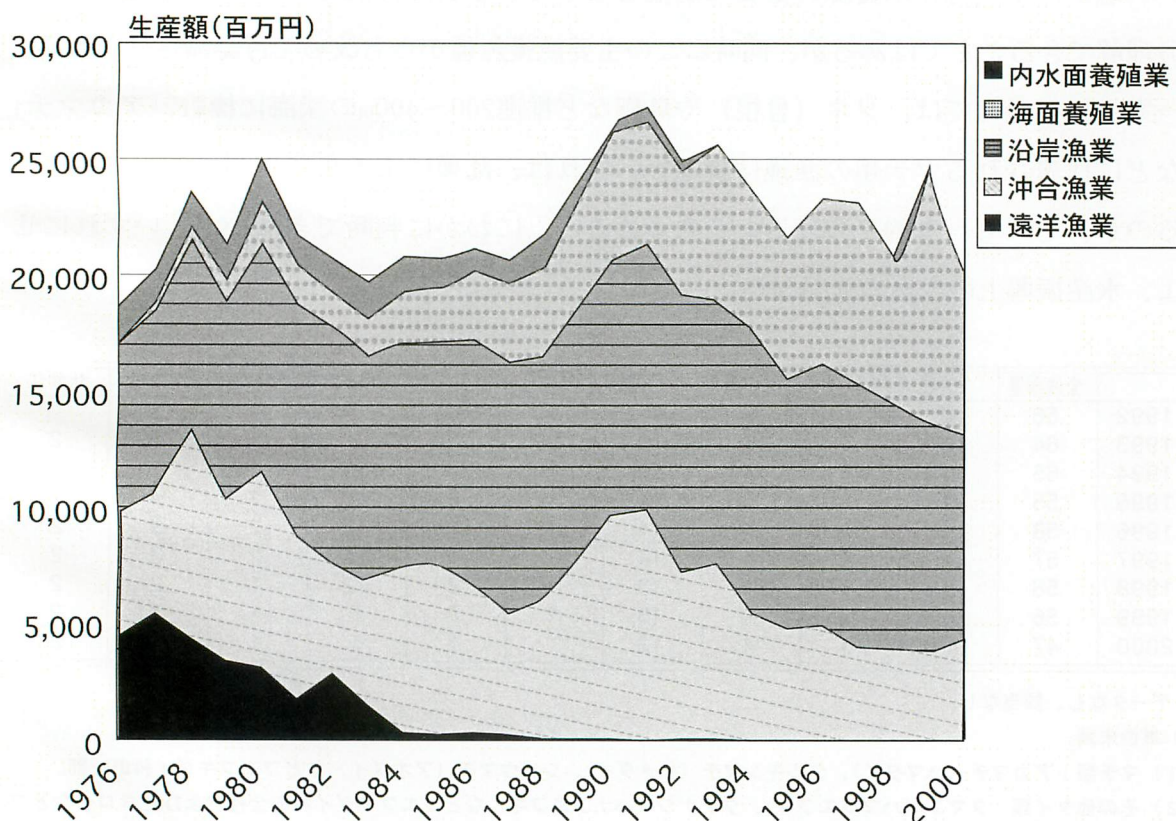


図7 沖縄県の部門別漁業生産額の推移。沖縄総合事務局農林水産部編
「沖縄農林水産統計年報」（各年次）より作成

注

¹⁾ 面積0.01km²以上の陸地をカウントした数値で、沖縄県の公式的な数字。ちなみに、海上保安庁の「海上保安の現状（1988年版）」によると、沖縄県の島数は365島で、周囲が200m以上の陸地をカウントした値。

²⁾ 最北端は徳之島の西方にある硫黄島。

³⁾ 人口5,000人規模の島になると、むろん、高等学校や銀行の立地は不可能であるが、生活環境基盤がある程度自立できる規模である（渡久地ほか, 1995参照）。

表4は最近9年間の伊平屋村の漁獲量の変化を示している。全漁獲量は、多少の変動はあるものの、全体的には横ばいもしくは減少傾向にある。現在、伊平屋村において漁獲量の多い主な魚種は、魚類ではブダイ類、ハタ類、その他タイ類である。ブダイ類とは「イラブチャー」や「マクブ」に代表されるブダイ科とベラ科であり、ハタ類は「ミーバイ」などである。いずれもサンゴ礁内やサンゴ礁周辺（礁斜面）を棲みかとする魚類である。その他タイ類も浅海域（ほとんどサンゴ礁周辺部）の魚種である。魚類以外では、コウイカ、サザエなどが重要で、それらもサンゴ礁とのかかわりが深い水族である。サンゴ礁が伊平屋村の水資源の重要な基盤をなしている店は、前途のモズク養殖からも充分理解できることではあるが、同時にこの主要漁獲魚種からも改めて再認識させられる。一方、伊平屋村では、ソネ（曾根）や島棚など推進200～400mの深海に棲む「アカマチ」などに代表されるマチ類の漁獲は少ない。これは、乱獲による魚類資源の減少に起因するのか、それも一本釣りの衰退を意味するのか、にわかに判断できないが、いずれにせよ、水産振興上の今後の検討課題といえよう。

	全漁獲量	マチ類 ¹⁾	その他タイ類 ²⁾	ハタ類 ³⁾	ブダイ類 ⁴⁾	イセエビ	ソデイカ	コウイカ	その他イカ類	タコ類	サザエ
1992	56	0	4	3	21	1	-	7	2	3	-
1993	64	0	8	3	10	2	-	8	5	6	2
1994	65	1	6	4	19	1	-	10	5	2	1
1995	55	1	5	3	14	1	2	9	1	4	1
1996	58	1	4	4	14	1	1	12	2	3	2
1997	57	1	4	4	14	1	1	12	2	3	2
1998	56	1	3	4	13	1	2	12	1	2	2
1999	56	1	3	4	13	1	2	-	1	2	2
2000	47	0	3	4	12	1	1	1	1	1	2

-データなし。該当なし。

0:単位未満。

1) マチ類：アカマチ（ハマダイ）、クルキンマチ（ヒメダイ）、シュウマチ（アオダイ）などフエフキダイ科の一部。

2) その他タイ類：タマン（ハマフエフキ）、クチナジ（ハナフエフキ）などフエフキダイ科の全種およびビタローなどフエダイ科の一部。

3) ハタ類：ミーバイなどハタ科の一部。

4) ブダイ類：イラブチャー（イロブダイ、キツネブダイ、スジブダイなどの総称）、クサバー（クギベラ）、マクブ（シロクラベラ）などブダイ科およびベラ科の全種。

沖縄総合事務局農林水産部編「沖縄農林水産年報」（各年次）より作成

参考文献

オダム、E.P. 著/三島次郎訳 (1975) : 『生態学の基礎 (下巻)』 培風社

喜名景秀・国吉清・伊良部忠男・生沢均 (1988) :

「土壌」、国土庁土地局監修『土地分類基本調査——沖縄本島北部及び周辺離島』、
沖縄県、pp. 29-41

鹿熊信一郎 (2002) :

「沖縄におけるパヤオ漁業の発展と紛争の歴史」、秋道智彌・岸上伸啓編『紛争の海
——水産資源管理の人類学』 人文書院、pp. 39-59

国土庁土地局 (1977) : 『土地分類付属資料 (沖縄県)』

島袋伸三・渡久地健 (1990) : 「イノーの地形と地名」、『民俗文化』 第2号、p. 243-263

政策科学研究所 (1974) :

『沖縄の自然環境——沖縄県土地利用計画附属資料 (Ⅱ)』、沖縄県
渡久地健・田場由美雄・石坂次郎 (1995) : 「小規模離島の生活環境基盤の現状」、沖縄
協会編『小離島の永続的発展を考える』、pp. 79-98

平凡社地方資料センター編 (2002) : 『沖縄県の地名』 平凡社

日本離島センター編 (1996) : 『離島振興ハンドブック』 大蔵省印刷局

前門晃・河名俊男・木庭元晴・目崎茂和・渡久地健 (1988) :

「地形分類」、国土庁土地局監修『土地分類基本調査——沖縄本島北部及び周辺離島』、
沖縄県、pp. 7-18

目崎茂和 (1985) : 『琉球弧をさぐる』 沖縄あき書房

no	島名(町村)	面積 ^{A)} km ²	島分類 ^{B)}		明13年頃 ^{C)}	明治36 ^{D)}	1960年 ^{E)}	1995年 ^{F)}	2000年 ^{F)}
01	硫黄島	2.50	H	V	509	727	無人	無人	無人
* 02	伊平屋島	20.59	H	M	1,434	2,205	3,233	1,336	1,420
* 03	野甫島	1.06	L	E	251	323	398	98	110
* 04	伊是名島	14.12	H	M	3,107	3,791	5,037	1,895	1,897
05	具志川島	0.47	L	E	24	97	49	無人	無人
06	宮城島(大宜味村)	0.24	L	T	NA	154	193	183	157
07	屋我地島	7.77	L	T	1,780	2,414	3,671	2,112	2,074
* 08	古宇利島	3.12	L	E	539	672	828	347	336
* 09	伊江島	22.73	L	E	4,438	5,702	7,492	5,131	5,112
10	瀬底島	2.99	L	E	999	1,583	1,837	810	868
* 11	水納島(本部町)	0.47	L	E	無人	—	103	61	53
12	伊計島	1.75	L	E	434	763	881	365	388
13	宮城島(与那城町)	5.51	L	E	1,435	2,647	2,844	1,038	1,016
14	平安座島	5.22	L	E	1,501	2,595	3,004	1,614	1,582
15	浜比嘉島	2.04	L	E	771	1,201	1,296	421	484
* 16	津堅島	1.88	L	E	665	855	1,670	554	531
* 17	久高島	1.37	L	E	621	593	569	259	229
18	奥武島(玉城村)	0.23	L	E	409	662	1,061	911	901
19	瀬長島	0.20	L	E	NA	91	無人	無人	無人
* 20	渡嘉敷島	15.29	H	M	706	1,086	1,409	725	730
21	前島	1.60	H	M	127	244	100	無人	無人
* 22	座間味島	6.66	H	M	515	713	948	611	597
* 23	阿嘉島	3.82	H	M	197	289	605	311	349
* 24	慶留間島	1.15	H	M	85	135	194	96	80
* 25	久米島	58.84	H	V			15,143	9,793	9,332
* 26	奥武島(久米島町)	0.63	L	T	4,360	7,796	134	21	20
* 27	オーハ島	0.37	L	E			95	5	7
* 28	粟国島	7.62	L	E	3,991	4,958	2,125	968	960
* 29	渡名喜島	3.46	H	M	未詳	1,100	1,485	616	523
* 30	北大東島	11.94	L	E	無人		992	575	671
* 31	南大東島	30.57	L	E	無人	240	3,404	1,473	1,445
* 32	宮古島	158.73	L	E	21,123	30,590	55,442	46,154	46,377
* 33	池間島	2.83	L	E	1,606	843	2,460	817	734
* 34	大神島	0.24	L	T	49	75	245	44	46
* 35	来間島	2.84	L	E	178	239	500	166	189
* 36	伊良部島	29.05	L	E	2,723	6,031	10,719	7,053	6,815
* 37	下地島	9.54	L	E	無人	無人	77	92	88
* 38	多良間島	19.73	L	E	2,583	3,303	2,706	1,401	1,331
* 39	水納島(多良間村)	2.15	L	E	152	271	190	8	7
* 40	石垣島	222.48	H	M	7,648	11,773	38,481	41,777	43,302
* 41	竹富島	5.42	L	E	783	1,155	789	262	279
* 42	小浜島	7.84	H	M	402	495	934	486	447
* 43	西表島	289.27	H	M	1,048	1,081	3,494	1,887	1,976
* 44	由布島	0.15	L	T	NA	NA	NA	30	32
* 45	外離島	1.32	H	M	NA	NA	2	1	1
* 46	新城島・上地	1.76	L	E			128	3	5
* 47	〃・下地	1.58	L	E	186	325	7	6	3
* 48	鳩間島	0.96	L	E	141	210	432	45	54
* 49	嘉弥真島	0.39	H	M				0	4
* 50	黒島	10.02	L	E	521	760	1,052	193	199
* 51	波照間島	12.77	L	E	623	795	1,422	595	551
* 52	与那国島	28.84	H	M	1,736	2,605	4,701	1,801	1,852
53	沖縄島	1,202.34	H	M	282,974	371,745	698,541	1,145,323	1,189,526
県計		2,269.09			353,374	475,932	883,122	1,273,440	1,318,220

付表 沖縄県の主要島嶼一覧

A) 面積は、「離島関係資料」沖縄県，2001年による。

B) H:高島，L:低島，M:山地島，E:サンゴ島，V:火山島，T:台地島，S:砂州島——目崎茂和(1980)による。

C) 「沖縄県統計概表」(明治13年刊)，沖縄県史20，付録 p. 5-65 による。

D) 「区間切島本籍人員族称別及棄児(12月31日)」，沖縄県史20，246-274 による。

E) 「第7回 琉球統計年鑑」琉球政府，1964年，第15表による(12月1日現在)。

F) 「離島関係資料」沖縄県，2003，および「沖縄県統計年鑑」沖縄県，2002による。

* 印：2003年現在，沖縄振興開発特別措置法で指定されている「離島」(40島)

NA: Not Available. (データ得られず。)

注：数値の太文字は5年前の国勢調査より人口が増えたことを意味する。

島名でイタリック (斜体文字) は、沖縄本島と架橋されている島